# 東九州支部報

第71号

公益社団法人日本山岳会　東九州支部
2015年１０月 25 日(日)発行

第１４回青少年体験登山大会（９月１３日(日)久住山山頂にて）

目　　次


| | | | |
|---|---|---|---|
| 支　部　活　動　報　告 | | 槍ヶ岳登山隊のトレーニング山行 | 9 |
| 第１４回青少年体験登山大会 | 2 | 槍ヶ岳登山隊の報告（Ｂ班） | 10 |
| 開聞岳と磯間岳 | 3 | 個人投稿 | |
| 山の安全を祈る集い | 4 | より安全な登山のために(１８) | 12 |
| 九重遭難慰霊碑修復登山 | 5 | ペンリレー(１８)「山と私」 | 13 |
| 根子岳東峰 | 5 | 私の無名山ガイドブック(５８) | 14 |
| 山の日制定記念・ｉｎおおいた・くじゅう | 6 | 会務報告　登山入門教室 | 15 |
| 山の日制定記念・大船山親子登山同行支援 | 7 | 会務報告　支部合同会議報告 | 16 |
| 坊がつる讃歌歌碑建立除幕式 | 7 | お知らせ | 17 |
| スズタケ枯死とシカの食害調査 | 8 | 後記 | 19 |

# 晴天に恵まれて

## 第１４回青少年体験登山大会

飯 田 勝 之(10912)

９月１３日（日）午前７時前に大分駅北口の貸し切りバス出発ブースに集まったのは５０名。大型バスの定員いっぱいだ。実はもっとバスに乗車の希望者がいたが、会員・会友などを牧の戸峠に直接行ってもらうなどの調整をした結果だ。今年の参加者には、去年までの常連組の大分工業高校山岳部に加えて、別府鶴見ヶ丘高校の登山同好会のも入って高校生が２３名と、とても賑やかなバスでの出発となった。

バスは大分道を通って由布院ＩＣから、由布院道の駅でトイレ休憩後、一路登山口の牧ノ戸峠へ。そのバスの中では、体験登山大会の意義や、山登りをする上での注意事項、楽しく楽に山登りをするためのノウハウなどの説明があった。バスの中の登山教室である。

朝の出発時には曇空で、雨の心配はあまりなさそうであったが、朝日台から見た九重連山には峰々の頂上付近に雲が被さっていた。

バスはほぼ定刻の８時半に牧ノ戸峠に到着。現地集合組と合わせて全部で７０名の登山隊となった。レストハウス横の広場で出発式。加藤支部長が「天気も良さそうだし、楽しい山登りを体験して下さい。皆さん元気で無事故でここまで下山しましょう」とあいさつ。中野会員のリードのもと全員でウオーミングアップの体操。そのあと、健脚組（中岳を経由して久住山頂、帰路は星生山経由下山）、元気組（星生山経由で久住山頂へ）、のんびり組（久住山頂往復）の三班に、参加者の各々自己申告により班編制。

午前９時、まずは健脚組から出発。続いて元気組、最後はのんびり組だが、人数が４０名と、多すぎるのでこの組をさらに二つの班に分けての出発。

初秋の日曜日とあって、一般の登山者も多く、賑やかな登山道を行き違い、追い越し、追い越されながら登っていく。心配していた天気は次第に良くなり、朝日台から見えていた、山頂を覆う雲はもうすっかり消えて、上空はほとんど青空にかわっていた。

今年の参加者には小学生がいなくて、最年少は中学一年生二人である。この二人、保護者と一緒にのんびり組に加わっていたが、いささか元気をもてあまし気味であった。

途中の休憩場所は最初が木製階段を登ついた、沓掛山稜線の肩。次が長い稜線道のケルンの場所、そして、扇ヶ鼻の分岐でも小休止して、最後に久住分かれ下の避難小屋前で休憩。そこから久住山頂目ざして一気に登る。

二班に分かれたのんびり組はそれでも長い列になり、トップと最後尾は相当の開きとなる。それを、休憩の都度まとめて、点呼をとりながらの歩行である。久住分かれ出発時にはのんびり組がかなり早く最初に山頂到着しそうなペースであったが、中岳を経て遭難慰霊碑前を経由してきた健脚組が、のんびり組の最後と一緒になって登頂。そのすぐあとに、星生山から星生崎を経由してきた元気組も到着。午前１１時５５分であった。

（中岳山頂の健脚組）

山頂は薄日のさす、涼しい風の爽やかな晴もよう。山頂標識前で写真を撮る順番待ちが続く。そして、各々弁当を開いて、思い思いの昼食タイム。１２時３０分に全員集合の記念写真を撮って、健脚組から下山開始。元気組とのんびり組は一緒に下山開始。

久住分かれの避難小屋前でトイレ休憩も兼ねて休憩したあとは、稜線のケルンで休憩、最後に沓掛稜線の肩で小休止。

午後２時３０分過ぎ、全員が牧ノ峠へ下山。最後に加藤支部長が参加者の皆さんへお礼のあいさつで解散。貸し切りバスの一行は、途中、由布院の道の駅で休憩のあと、国道２１０号線を大分へ向けて走り、午後５時過ぎに大分駅に帰着。好天に目踏まれ、全員事故もなく１日を終了した。

（登山口に勢揃いした大分工業・鶴見丘両高校の岳人一同）

参加者…（会員）加藤、野村、飯田、園田、中野、田所、久保、下川、中島、高橋、宮原、渡辺（和）、若月、土屋、（会友）柳瀬、井上（紀）、藤沢（あ）、尾家、木下、丹生、久知良、清水（道）

# 開聞岳と磯間岳

## ７月月例　山行報告

## 開聞岳（924m）

清水久美子（会友 178）

7月18日

開聞岳は薩摩半島南端にあり、標高924メートルと千メートルには届かないが、日本百名山のひとつです。その開聞岳を目指して大分を出発し、13時前にこの日宿泊するログハウスのあるオートキャンプ場に到着。

そこから開聞岳を見上げると、残念なことに頂上付近は雲に覆われている。頂上に着くころにお天気が回復していることを期待しつつ、そこから約10分で2合目の登山口へ。山頂まで螺旋状に伸びている登山道、7月でかなり蒸し暑さを感じながら、樹林帯をひたすら歩きます。

5合目に到着すると展望デッキがあり、長崎鼻方面が望める休憩ポイント。ここを過ぎると登山道に大きな岩石が現れ、道も少しずつ険しくなっていきます。樹林帯を抜けて、岩場を少し登った7.1合目とされる場所で展望案内板発見。晴れていたら屋久島や種子島などが望めるビューポイントでしたが、今回は海岸線の半島は見えましたが遠くの島々まではっきり見ることができず残念でした。

9合目辺りでこの山初となる木のハシゴを上り、山頂を目指し歩き続けます。暑さでかなりバテ気味でしたが、16時頃ようやく山頂に到着。

雨は降っていなかったものの、残念ながら360度見渡せるはずの山頂は眺望は雲で全く見ることができませんでした。頂上での滞在もそこそこに下山を開始。山を下って行くにつれ、雲が少しずつ晴れ、下りで少し余裕も出てきたので、7.1合目のビューポイントや5合目の展望デッキなどで景色を楽しみつつ歩を進め18時30分頃ようやく登山口である2合目に到着しました。暑さでかなりバテましたが、初めて開聞岳に登頂できて良い山行でした。

（開聞岳山頂にて）

## 磯間岳（363m）

阿部幸子（15032）

7/19日

登山二日目は、磯間嶽です。昨夜は冷房の効いたロッジで、開聞岳に登った達成感一杯の目覚めでした。さっそく朝食の準備に取り掛かり、卵入りのおじやでお腹を満たし、コンビニで昼食を調達して万全の出発。

リーダーの木本さん指示で8:40分林道終点から登山開始。人形岩を経て頂上を目指すも大岩稜の前で、立ち止まってしまった。先頭の柴田さんが、頂上でカメラを廻しながら360度の展望を楽しんでいるのが見える。他の何人かは続いて登り、残った私は佐藤さんの補助ロープで星子さんの合図で登り、安心して頂上に立つ事が出来ました。

しばらく行くと、目の前に岸壁が現れ私と星子さん池辺さんはう回路で、他のメンバーを待つことにしました。さすが男性陣は岩を降りては来るではないか！途中緊張で何度も岩にしがみ付きながら、下川さんの誘導の元慎重に降りた。

途中休憩の岩の上では、頂上を振り返っては良く登れたなあと感動して眺めていました。3：15分林道登山口に無事下山。ホッとしました。岩登りにハラハラ、

ドキドキ、しながらスリル一杯の磯間獄でした。テントサイトに３ハリに荷物を運び近くの銭湯へ直行。炊事二日目は、すき焼きで打ち上げです。お酒を飲みながら語る人、星を見る人、眠る人10時には就寝です。夜テントを打つ雨音がして三日目の間野岳、小金峰は中止して大分へと車を走らせました。
参加者…　星子、木本、佐藤、中野、下川、阿部、芝田、松浦、池辺、清水(道)、清水(久)、柳瀬

# 山の安全を祈る集い

## ７月月例　山行報告

下川幸一（14504）

今から８５年前（1930年、昭和５年８月）、九重山で初めての遭難事故があった。２人の若者が折からの台風接近で暴風雨の中、疲れと寒さで力つき、久住山御池の石室近くで遭難死したのである。翌年、現場近くの高台に遭難碑が建てられた。その後長い期間風雨にさらされて、地盤の風化等のため倒れたままの碑を、６年前の平成２２年６月、加藤支部長中心の東九州支部メンバー数名で発見。７月に山のいで湯愛好会のメンバーが中心となって見事に約７００kg の重い石碑を修復するという大作業が行われた。

同年８月８日に８０回忌法要が東九州支部会員、会友、山岳連盟他多くの山仲間が参列して行われたが、当日は神事直前で激しい風雨となり、近くの「池の避難小屋」に急遽変更となる。

翌平成２３年８月７日（日）九重の遭難事故を無くそうとの願いで、法華院山荘の弘蔵岳久院主と東九州支部合同で８月の第１日曜日を「九重慰霊の日」として恒例の行事にするよう決定。「山の安全を祈る集い」として広く一般の登山者にも呼びかけることとした。

過去５回のこの行事が全て突然の暴風雨等の悪天候で避難小屋や法華院温泉観音堂に変更して行われてきた。しかし今年８月２日は晴天の中、初めて慰霊碑の前で法要を行うことができた。会員を含めて約３０名の山岳関係者が参列し、予定通り午前１１時に神事が始まる。初めに加藤支部長より、８５年前の遭難の説明があり、遭難碑の建立、修復についての経過報告がされた。続いて法華院温泉の弘蔵岳久院主の読経、全員の焼香で安全祈願をした。

その後、遭難碑の前でお弁当を開いて昼食をする。なお、今回の山行には、昨年の登山入門教室のレベルアップ研修で北アルプス槍ヶ岳に挑んだが、暴風雨のため途中断念した１２名全員が訓練登山として参加している。昼食後、中岳、天狗が城に登り、最後に星生崎の岩場での訓練を行った。佐藤秀二君のザイルを使ったロッククライミングを緊張しながら慎重に登り、全員自信をつけたようである。

１４時１５分に星生山で記念撮影をし、先行グループを追いかけ、１５時４０分に全員牧の戸登山口に到着。ここで全員の解散式を行い、我々のグループは湯の平の橋本温泉へ直行。ここで予期せぬハプニングが発生する。Ｓ氏が浴室のタイルで滑り頭部を強打。意識不明の事故となり、慌てて救急車を呼ぶ騒動となる。しばらくしてＳ氏の意識が戻り一同安心！！慎重な運転で大分へ帰る。

（遭難碑前にて）

（参加者）（会員）加藤、飯田、中野、佐藤（秀）、塩月、渡辺（千）、薬師寺、宮原、若月、工藤、土屋、下川（会友）渡部、木山、遠江、芝田、尾家、秋吉、清水（久）、松浦、丹生、久知良、河野、（会員外）尾登、加藤（衣）、安部（寛）、甲原、丹生（中学生）

(P.S.) 8月25日に強い台風15号が熊本に上陸し、福岡から日本海へと九州縦断し、大災害をもたらした。8月27日のブログで遭難碑が倒れているとの情報を加藤支部長から聞いて驚く。おそらく台風15号の直撃で倒れたものと推測できる。
9月13日に山の関係者が現場チェックをし、修復についてミーティングする。10月10日（土）11（日）の2日間で修復することとなった。

後日談

# 九重山遭難慰霊修復登山

１０月１０日～１１日

加 藤 英 彦（8765）

８月２日支部主催行事「山の安全を祈るつどい」を行った。そのシンボルである昭和６年に建てた久住山御池の遭難慰霊碑が倒れているとの情報が入った。８月２７日に撮った写真がブログに載っている。

８月２５日の台風１５号の風で倒されたのであろう。９月６日現地をたずねて確認し再建の手配、打ち合わせをした。１０月連休に工事をするようにして事前に法華院の手で資材、道具を現地まで担ぎ上げるよう手配した。

１０月１０日　総勢７人で１０時３０分牧ノ戸峠より現地集合。資材を３往復して小屋よりはこぶ。現場監督の高瀬君（元大分登高会、前回の修復にも監督をした）より工事概略の説明の後とりかかる。

まず車のジャッキ２台が入るようすきまをつくり上げていく。平行にあがった時点で石碑を台座にあわせて角材をてこにして動かす。つぎにパイプサポートであげていく。短いのから長いのまで４種類のサポートをまわしながら上げていく。できた空間に角材を組み立ててささえていくようにする。万一倒れた時の補強になるようにする。慎重な作業となる。パイプサポートを２人でまわしながら左右のバランスをみながらすこしずつ上げていく。サポートと地面との接点、また盤との接点の養生が注意するところだ。まわすのに力がいり、組み立てるのにも慎重になる。サポートを長い方に変えながら最後になったころ石碑の角度が７０度以上になったころロープで盤を反対にひっぱったところあっけなく台座にたてかっかた。思わず拍手そして万歳の瞬間だった。

とりあえずの補強として番線にて盤と台座をしばりつけ固定した。今後どのように固定するか、再度倒れないようにするにはどうするかが課題として残った。

作業は昼食をはさんで３時間かかった。資材を池の小屋に運び下山。その日はくじゅうヒユッテに泊まり、翌日１１日再度現地まで登り資材、工具等を全員にて担ぎおろした。２日間手伝いされたみなさん。大変ごくろうさでした。きつい２日間ではあったが、なにか良い仕事をしたという爽快感をあじわうこととなったでしょう。また２日目お弁当を用意していただいた工藤さん。ありがとうございました。

（遭難慰霊碑修復作業のようす）

参加者…１０日＝加藤、塩月、宮原、桜井、尾家、河野、　会員外　（高瀬、尾登　佐藤）

１１日＝加藤　宮原、尾家、薬師寺、河野、加藤（平）、工藤　（高瀬）

# 根子岳東峰（1408.8m）

９ 月 月 例　山 行 報 告

飯 田 勝 之（10912）

９月６日（日）、天気予報は阿蘇地方は曇時々雨の予報である。午前７時大分駅南口に集まった１４名。天気予報で前日までに断ってきたメンバーが３名いた。やはり雨の日の山登りはお望みじゃないらしい。

とまれ、４台の車に分乗して出発。大分出発時には雨はまだ降っていなく、むしろ明るくなってきそうな空模様。しかし、車が西に進むにつれあやしい空模様となり、とうとう竹田あたりから雨粒がフロントガラスに当たり出した。天気が良ければ鉢井尾根を登り、箱石尾根を下るルートを考えていたが、このルートは両方とも半分までが猛烈なカヤの中なので、雨の中を通れるものじゃない。そこで大戸尾根ルートに変えることにした。このルートは、最近ヤカタガウドや見晴新道ルートが崩壊のため通行止めとなっているため、根子岳の最もノーマルルートとして利用されている道だ。

上色見の牧場の奥にある登山口まで車を入れて、雨具をつけて９時３０分出発。スギの植林地の中を最初

からかなり急な登りだ。登山者が多いようで、良く踏まれているが、それだけに雨の中の道は良くすべる。ほとんど傾斜の変わらない、単調な登りが続く。雨霧の中なのでどうせ何も見えないが、展望のない林の中の道だ。急な登りで雨具の中が暑くなる。３０分から４０分ごとに休憩を入れながら登る。

１時間あまり登ると傾斜がゆるみやっと息がつける道となった。低灌木とカヤ野の尾根道で、天気が良ければ左手に天狗の岩峰や、荒々しく削れた根子岳の谷筋などが見えるところだが、ホワイトアウトで何も見えない。すこし行くと再び急な登りだ。まわりはカヤとヤシャブシやノリウツギの灌木で、それらに捕まりながら、すべりやすい道を細心の注意で登っていく。そして、急な登りが終わると、カヤの中の平らなところで、右から登ってきた道と合流。前原牧場からの道で、近道だが急な登りなので避けた道だ。

山頂はもう目と鼻の先だが、少し遅れた組もいるし、急登を終えたあとなのでここでひと息入れて再出発。１１時３５分東峰到着。カヤをかき分かき分けきたので気づかなかったが、いつの間にか雨はほとんどやんでいた。しかし深い霧の中だ。後続の組を待ってここで昼食休憩。

１２時４０分下山開始。下りは登り以上に細心の注意が必要だ。それでもみんな、少なくとも２・３度はすべって、尻餅ついたり転んだりしていた。下りは１時間３０分ほどで着いた。雨はもうすっかり上がって登山口から見上げると、山頂部分が見えている。ちょっと悔しいが、まあ、こういう天気の山登りも一興と、いうところだろう。皆様ご苦労様でした。登山口で解散し、４台の車は温泉に寄ったり回り道したりと、それぞれで帰途についた。

（霧の中の根子岳東峰山頂にて）

参加者‥野村、中野、久保、牧野、高橋、石川、遠江、池辺、木下、清水（道）、清水（久）、丹生、久知良、飯田

## 「山の日」制定記念 in 大分・くじゅう

加藤英彦（8765）

来年(2016 年)８月１１日施行される国民の祝日「山の日」のプレイベントが去る８月１１日にくじゅう長者原にて行われた。国主導のイベントで大分県生活環境部の主管のもと、九重町、竹田市、そして文部科学省、林野庁、国土交通省、環境庁、と４つの省庁合同で後援であり、全国「山の日」協議会も協賛するというかたちをとった。

オープニングアトラクションで地元、九重町の九重あばれ獅子＆九重樽太鼓の勇壮な競演が披露された。式典は九重町長坂本和昭が開会宣言をし、広瀬勝貞知事が主催者側を代表して挨拶。来賓として谷垣禎数一全国「山の日」協議会会長、衛藤征四郎超党派「山の日」議員連盟会長、田中利明大分県議会議長から順次祝辞がのべられた。来賓紹介で本部よりみえられた大久保春美日本山岳会副会長の紹介もあった。次いで応募した「山へのメッセージ」をミス日本みどりの女神佐野加奈さんが読み上げた。その後，芹　洋子さんと地元コールやまなみ&飯田こども隊のみなさんで「坊がつる讃歌」「山は心のふるさと」の合唱が行われおおいに盛り上がった。そしておおいた「山の日」宣言が地元小学生４人で読み上げた。

最後に竹田市長首藤勝次により閉会の言葉で終了した。約１時間のイベント参加者は約３００名、東九州支部員も多数出席された。

なお、来年はこの行事は長野県上高地にて行われることがきまっているようである。

（メッセージを読むミス日本みどりの女神）

この行事の一環として竹田市でおこなわれた「親子登山会」親子で自然を楽しみながら大船山にのぼる体験登山会の指導者として支部より木本、園田両名が参加した

また、大分合同新聞の８月１１日朝刊　「山の日」の記念広告の一枠に『日本山岳会東九州支部』として協賛広告に名を連ねた。

## 「山の日」制定記念
## 大船山親子登山への同行支援

園 田 暉 明（13135）

大分合同新聞の８月１１日朝刊　「山の日」の記念広告の一枠を東九州支部として協賛広告をおこなった。

８月１１日、「山の日」制定記念行事の一環として行われた、竹田市主催の「大船山親子登山」へ、補助者として支部から木本義雄さんと共に派遣され、県山岳連盟員、同市消防士の方々と共に登山に同行することとなる。当日朝、木本さんの車で大分市を出発し、集合場所である竹田市直入町有氏の「パルクラブ」駐車場に到着。

登山参加者は、地元直入地町小学校６年生７名にその母さん方を加えた１５名、それに竹田市職員に我々補助者の総勢２３名である。

午前７時４０分、観光登山バス等に分乗し標高１，１００メートルの大船山・入山公廟登山口に向かう。この道路は、板切牧場内にあった牧野道を池の窪という大船山中腹の登山口まで新設延長したもので、本年６月から予約制で観光登山バスが運行しているとのことである。

登山口に到着後、全員で体操を済ませて、午前８時に登山開始。列の先頭と最後尾、それに中間の適宜の位置に我々補助者が入る。

登山口から入山公廟入口少し手前までは新設されたコースで、リョウブや馬酔木の灌木が日差しを防いでくれ涼しい。中ほどの一部草原となった地点で最初の小休止を取る。入山公廟に到着し、市職員による廟の説明を聞きながら大休止。

入山公廟から兜岩の間は、傾斜も急となり、大きな石が目立つようになる。子供は元気であるが、お母さん方の喘ぎがひどくなり、立ち止まりを繰り返しながら進む。兜岩での大休止では、眼下の直入町中心部や岡城方面への遠望を親子が楽しんでいた。

兜岩から先は、何度も大石に這い上りながら進む一番の難所。その中で所々にある、シモツケソウの紅色の花にお母さん方からキレイ、キレイの声。苦しさから心が解放されて、元気を取り戻す一瞬である。

開始。子供たちは集団となり先頭を行き、疲労が足に来ている様子のお母さん方がゆっくり遅れながら続く。

入山公廟の少し手前では、ヒヨドリバナに群がるアサギマダラが一斉に舞い上がる珍しい光景に遭遇。姫島に毎年、沖縄あたりから飛来することで話題になっているあの蝶である。

下山は順調に進み、１度大休止を入れただけで１４時９合目あたり、台地状の地点に入ってコースが平坦となってからは歩みもスムーズとなって、１１時丁度、全員が無事に山頂に到着した。登頂に感激し、手を取り合い歓声をあげる親子達。青空の下、山頂から眺めるくじゅうの山々や眼下の坊がつる等は実にきれいで、正に我のグループを大船山が歓迎しているような山頂であった。昼食を済まして１１時４０分、往路と同じコースで下山全員が登山口に到着。故障者なし。出発時と同じ車を利用して、出発地の駐車場に着き解散する。

子供たちの思い出となるであろうこの登山に、同行出来たことに喜びを感じる１日であった。

## 「坊がつる讃歌」歌碑建立
## 除 幕 式 報 告

加 藤 英 彦（8765）

８月１１日　「山の日」の式典の前の時間　８時３０分より長者原ビジターセンター駐車場上の「平治号」横の広場にて行われた。「坊がつる讃歌」歌碑建立実行委員会会長の坂本和昭九重町長が挨拶。衛藤征四郎超党派「山の日」議員連盟会長の祝辞、来賓の広瀬勝貞大分県知事代理の祝辞。除幕の儀　各代表者、関係者総勢１８名による除幕（テープカット）がおこなわれ好天のもと見事な石碑が表れて全員が拍手、歌手の芹洋子さんが登場し

（除幕式で坊がつる讃歌を歌う芹洋子さん）

地元のコールやまなみ＆飯田こども隊をバックコーラスとして「坊がつる讃歌」と「四季の歌」を歌いあげ、その澄んだ歌声はくじゅうの山々に響きわたり聞く人を魅了した。
三俣山をバックに見事な石碑が披露され、大いに盛り上がった除幕式となった。
　芹洋子さんも、自分の持ち歌である「坊がつる讃歌」の石碑ができたことは大いに誇らしいことであろう。

## 寄付のお礼

　この歌碑建立の実行委員会で私も発起人の一人に指名されたために支部員はじめ多くの友人、知人に寄付のお願いをしました。おかげ様で多くの方々に気持ちよく寄付をしていただき大変感謝申し上げるしだいです。ありがとうございました。
目標額に達し見事な歌碑が完成し立派な除幕の式典ができました。この後に別会場にて行われた祝賀交流会の席にて「多くの方々に呼びかけ多額の寄付を募った」ということで会長より感謝状と記念品を頂きました。これも皆様方のご協力あってのことだと心よりお礼申しあげます。
私の山の師と仰ぐ、故松本征夫元福岡支部長、故梅木秀徳前東九州支部長、お二人の作詞したこの「坊がつる讃歌」についての思い入れはことの他強く、私もこの歌碑の建立にはなんとしても成功させねばならないとの使命感で今回はおおいに力をいれて取り組みました。その結果おもいもよらぬ感謝状でした。かさねてお礼もうしあげます。
　まだ碑をご覧になっていない方は一度歌碑を長者原に訪ねてみてください。そしてお二人をしのんで歌碑の前で「坊がつる讃歌」を歌ってみてください。
気持ちがすっきりすることでしょう。そしてこれからも機会あるごとにこの歌を歌っていきましょう。

# 秋のスズタケ枯死とシカの食害状況調査

飯田勝之（10912）

　去る１０月３日（土）、６月につづいて今年２回目のスズタケ枯死とシカの食害状況調査作業が、大分県植物研究会との共同作業で本谷山西の稜線で行われた。
　この日、集合場所の緒方町の道の駅「原尻の滝」に午前７時に集まったのは、我が支部会員８９名、研究会が７名、県庁の担当者２。最初からこの調査を指導してくられた生野喜和人先生が亡くなられた２回目の調査である。
　今日の調査の打ち合わせをして、６台の車に分乗して尾平トンネル宮崎県側の登山口に向かう。ここで、調査班の編成で我が支部参加者は定点観測班と稜線移動調査班に分かれる。８時３０分に一緒に登山開始で、約３０分で祖母・傾縦走路の稜線に着く。定点観測班はそのまま縦走路を観測地点へ。から約１．５km、１時間半のところに県環境企画課が設置した観測地地点へ直行。ネットで囲われた中のスズタケの状況と、囲われていない場所の状況と計測する作業。
　心配していた天気は上々で、稜線に吹く風はもうちょっと涼しすぎる感じだ。緒方の盆地は黄金の穂波が風に吹かれて、秋真っ盛りであったが、１４００mの稜線はもうすっかりはが色づいている。しかし、シカに食害された稜線の木々は大半が枯死して、全くスズタケが見られなくなっているまので、かっての奥祖母新道縦走路の、あの濃密なスズタケのブッシュと深い原生林の面影はない。
　定点観測地点のスズタケは、ネットの中ではしっかり新芽が伸、深く地面を歩覆って茂っているが、ネットの外はタケの丈も短く新芽は短く喰われて、生育もまばらである。定点観測班はネットの中のタケの背丈の計測から開始。

（ネット内の竹の計測をする定点観測班）

　移動調査班は６月に続いて実生の新芽の調査だ。峠から本谷山までの縦走路の両側５m以内にある新芽の

（シカに喰われたリョウブとナツツバキの木肌）

（スズタケの枯死が進行しているようす）

樹種とその数を記録しながら登る作業だ。前回同様に、高度の低いところには、数多くの新芽が見られ、その数を記録するのが一苦労の作業だが、高度を上げて行くにつれ、その数は少なくなっていく。そしてスズタケの残っている標高１５００m付近から上はごく少い。しかし、スズタケのも枯死が今も確実に進行しているのが分かる。定点観測地点の少し手前の道の両側に沢山残っていたタケが前々回、前回と見るたびに減っていき、枯死が進んでいるのが分かる。三国岩と呼ばれる展望岩の付近も、青々と残っていたスズタケがかなり枯れかけているのが見えるそうした状況を記録しながら正午過ぎに山頂到着した。昼食後下山すると、定点観測班はネットの外の観測を残して昼食中で、即時が終わって全員で作業続行。午後２時過ぎに全作業を終了である。午後４時前に下山後、トンネル口広場で。解散式をして来年６月の調査時に再会を約して解散となった。

参加者…加藤、飯田、久保、下川、宮原、渡部、石川、渡辺（千）

## 登山入門教室受講者レベルアップ講座

（その１）

# 槍ヶ岳登山隊のトレーニング

（九重山系　７月４日・５日）

尾家暁夫（会友１５８）

このトレーニングは「登山入門教室」受講後、槍ヶ岳に挑みたい者達に急登・縦走に耐え得る体力養成、岩場・梯子段・鎖場等の難所を通過する際に必要な技術の習得などを目的の行ったものである。

実は昨年８月に第１回・第２回登山入門教室修了者のメンバーで槍ヶ岳山行に挑んだが、３日目に風雨に遭遇したため東鎌尾根踏破を断念し、水俣乗越から槍沢へのエスケープ。下山後の上高地西糸屋山荘で「来年もう一度槍ヶ岳に挑戦させて欲しい」全員でリベンジ登山を決意したところである。

その後、以前より難しい岩場でのトレーニングなどを開始し、これに並行して槍ヶ岳挑戦で体力不足を自覚した私を含むメンバーは体力強化の自主トレに励み、今回の合宿トレー人ごとはこびとなった。

### 今回のトレーニング山行（九重山系縦走）の目的と内容

（目　的）１ヶ月後に迫った槍ヶ岳山行に必要な体力と装備の確認。

（内　容）槍ヶ岳山行時と同じ装備、同重量のザックを背負い２日間の九重山系縦走体験。

（日程）

７月４日　大曲Ｐ（12:15）→すがもり越（13:05）→あせび小屋（14:30）

７月５日　あせび小屋発（7:30）→鉾立峠（8:15）→白口岳（9:30）→稲星山・鳴子山分岐（9:50）→鳴子山（10:20）→稲星・鳴子分岐（10:35）→稲星山（11:05）→池ノ小屋（11:35）（昼食）→中岳（12:15）→天狗ヶ城（12:25）→久住分れ（13:10）→すがもり越（13:48）~→大曲Ｐ（14:50）

### 山行報告

７月４日、大分市内のスーパーで１１人分の夕食・翌朝食・昼食用の食糧・調味料・酒類等を買出し、これを参加者で分担。ザックには既に槍ヶ岳山行を想定した重量が入っていた。当日は雨、カッパを着用して大曲駐車場からの登りは思ったより辛かった。すがもり越で三俣山経由で坊がツル下山の希望者を募ったが

誰もいない。中でも今回初参加の河野氏は大量の食材・飲料を引受けて最も重くなったザックを背負っており、その歩きは特に辛そうで、みんな一路あせび小屋へと下りだした。

あせび小屋に到着しザックを置くと、まずは法華院温泉へ。雨に冷えた心身を温め手足を伸ばすとテンションが上がる。あせび小屋での夕食は野菜・豆腐・肉で簡単に出来る鍋料理。料理担当になった和菓子屋の薬師寺氏曰く「俺がやると甘くなるぞ」。そのとおり甘い鍋になったが、最後は西さんがいいあんばいに仕上げられ一同安堵。

乾杯で皆が和気あいあいに語り出した時、支部長が県下で最初の海外登山、１９６５年のアフガニスタン国ヒンドウクシュ山脈のコー・イ・モンディ峰(1680m)挑戦とこれに参加された支部の先達のことをＤＶＤを観ながら鑑賞。さらに宴が盛り上がると支部長のハーモニカ演奏が始まり、興に入った者達が山の歌を１０数曲合唱。

翌５日はあせび小屋から鉾立峠を経て白口岳を登った後、稲星山・鳴子山分岐から鳴子山へ。２０分位歩いた頃、先頭の支部長が立止まり登山路の左側の藪の中にかろうじて咲き残った一輪の白い花を見つけて「これがオオヤマレンゲだ」と一言。小雨の中を黙々と歩いて来た男達は交互にその花を見てカメラに収めた。

花を見たあとは引き返して稲星山へ。小雨の中の山頂は霧で何も見えなかった。稲星山を下山し池ノ小屋での昼食時に、支部長が本気のようなギャグのような言い方で「俺と下川君が一緒の登山は必ず雨が降る。俺たちは雨男の最強コンビなんだ」とポツリ。この期に及んでこんな話を聞き目まいを覚えたのは私一人だったのだろうか？

私達メンバーのほとんどが中高年だが仕事をもっており登山に没頭出来る身分ではないがが、登山入門教室受講がきっかけで、「槍ヶ岳に登る」という頭抜けた楽しみと励みができた。この事が、ややもすれば退化へ向かっていた心身を進化に転じさせてくれている。この変化は、登山入門教室受講と会友登録、登山初心者に対する育成支援活動によるものでだと心から感謝致しています。

参加者…（会員）加藤、中野、下川、西(あ)、薬師寺、宮原、（会友）松浦、丹生、河野、尾家、（ゲスト）尾登（撮影）

（その２）

## 槍ヶ岳登山隊の報告（Ｂ班）

河野達也（会友２０３）

８月１２日午後５時１７分バスで上高地バスターミナル到着。目の前の奥穂高の景色に圧倒される。多くの観光客と登山者が賑わっている「河童橋」を渡り、日本山岳会上高地山岳研究所に向かう。思っていた以上にきれいな建物。今夜はここが宿である。Ａ班　８名は合戦尾根を登り表銀座コースで槍が高へ、我々Ｂ班３名は上高地から槍沢経由だ。

１３日5:00頃、雨音で目が覚める。（なんと）本降り。予定では6:30出発であったが、雨のため遅れて7:15出発。横尾までは道が広く傾斜もほとんどない。多くの登山者と観光客が往来しまだ観光地という印象。横尾を過ぎると道も狭くなり観光客の姿も見られなくなる。一の俣の小屋に到着(11:11)。昼食後は小屋で退屈な午後を過ごす。

（上高地山研前で・左二番目管理人さん）

１４日5:30より朝食。ロッジの公衆電話で大天井ヒュッテに問い合わせたらＡ班は 5:50 に出発したとのこと。天気は7時前から回復。雨がやみ、晴れ間も出てきたので出発準備。7:15 槍沢ロッジ出発しかし 9:26 雨が降り始めたため雨具とザックカバーを装着。9:56 天狗の分岐、11:43 播隆窟、12:26 殺生分岐となかなかペースが上がらない。13:30 ようやく槍岳山荘着。宿泊手続きのため行列に並んでいると、気が付いたら、目の前にＡ班のメンバーの元気な顔が見えた。お互い声をかけあった。Ａ班、Ｂ班共、ほぼ同じ時刻に小屋に到着していた。ようやく２日ぶりに再開を果たすことができた。

部屋に荷物を置き、乾燥室に濡れた衣類を掛けて外に出てみた。しばらくすると、雲が一瞬晴れ、初めて

山頂を目のあたりにすることができた。これまで悪天候で槍ヶ岳を登山しているという実感はなかったが間近に見て驚き感動したが、同時に山頂までの険しい傾斜は想像以上であり、恐怖を感じた。

明日の天候がどうなるかわからないため、槍の先に登れるうちに登っておこうということで、午後３時に出発。恐怖で一杯であった。30年前に教わった「三点支持」を使った。何も見えない霧の中、必死で登っていくと最後のはしごが見え、とうとう槍先に立つことが出来た。頂上は雲の中で、視界は無かったが、槍ヶ岳山頂に立ったという嬉しさでいっぱいになった。山頂は人が多く、次々に登山者が上ってくる。

下りを心配していたが、いざ下り始めると不思議と恐怖はなかった。しかし部屋に戻るとこれまでの疲れがどっと出た。全員で食事をし、祝杯を挙げ、喜びを分かち合う。２０時３０分が消灯。

１５日、山頂からの日の出を見るために、早朝から登頂予定である。４時ごろ真っ暗な中ヘッドランプをつけて出発。夜間の山行は初めてで、しかも岩場登りは不安であったが、皆のヘッドランプの明かりで支障はなく、すぐに不安はなくなった。昨日よりは余裕を持って登れたように思う。

５時１５分ご来光を拝む。雲のために予定より１０分遅れであった。強風の寒い中で待たされた後だが、朝日を見た瞬間、自然とこみ上げるものがあり涙が出てきた。今日登ってよかった。その後すぐに下山を始めた。

（槍ヶ岳山荘前にて）

山荘で朝食を取った後、小屋の前で全員の記念写真を撮影し、６時２０分下山を開始。槍ヶ岳山荘から数百メートル下り、後ろを振り返ると、前日はガスでまったく見ることができなかったが、雲ひとつない青空を背景に槍ヶ岳がたたずんでいた。この景色を見ることができてよかった。

その時、数十メートル先に数匹のサルの群れを確認した。もともと標高２５００メートル以上の高山帯にはいなかったニホンザルが、ここ２０年ほどの間に生息範囲を広げているという。サルがライチョウを食べている姿が研究者によって確認され、ライチョウの生息に深刻な影響を及ぼす可能性があるということで、今後環境省などで対策を検討していくとのことだ。

槍沢キャンプ場(9:25)着。湧き水がおいしかった。槍沢ロッジ(10:00)　着(ここで昼食)一の俣、横尾、徳澤園と下り、明神館(14:15)着、穂高神社に参拝。長い下りで行けども行けどもゴールが見えない。足が動かない中、必死で皆の後を追うが、どうしても遅れ気味になり、皆が休憩した際に追いつくが、追いついたと思ったら直ぐに出発。休憩できない・・・。とうとう上高地ホテル着(時間記録なし。やっと到着。これほど疲れたことはない。足がいうことを利かない。

全員で夕食をとり、お互いの労をねぎらう。その後は、宴会となり、登頂・下山が無事果たせたという安堵もあり、大いに盛り上がった。

１６日、体中が痛く、階段もまともに降りれない状態であった。全員で朝食をとり出発までにウェストン碑見学。

今回の山行は自分にとって、これまで未経験の高所と期間、そして能力的に限界と諦めていた岩場へのチャレンジであった。若い頃ならまだしも、４０代後半という年齢になった自分が、高校生時代以上のハードルをクリアできるとは思っていなかった。しかしながら、実際にチャレンジし、クリアしてみると、自己研鑽を行い、達成しようとする意志があれば、可能性は無限にあるのではないかとさえ思えてきた。もちろん、１人では到底ここまで到達できなかったことだし、日本山岳会東九州支部の方々に心から感謝申し上げたい。

〔参加者〕

（A班）佐藤、中野、薬師寺、尾家、宮原、清水(久)、丹生、松浦

（B班）加藤支部長、秋吉、河野

個人投稿

## より安全な登山のために N018

### 『正常性バイアス、マーフィーの法則 予測原則』

安 東 桂 三　(9193)

正常性バイアスとは、災害に直面したとき、「正常性バイアス」と呼ばれる心理状態に陥ることがあります。これは望ましくない現実を前にして「まさかそんな醜いことが起きるはずがない」「とりあえず自分は大丈夫だ」などと認知が歪んでしまう現象で、日常生活を含めて、様々な場面で誰にでも起こります。（山　2015年5月号（No.840）日本山岳会刊より）

マーフィーの法則とは、「失敗する余地があるなら、失敗する」、英語では、“If it can happen, it will happen”「起こる可能性のあることは、いつか実際に起こる」です。

予防原則とは、化学物質や遺伝子組換えなどの新技術などに対して、環境に重大かつ不可逆的な影響を及ぼす仮説上の恐れがある場合、科学的に因果関係が十分証明されない状況でも、規制措置を可能にする制度や考え方のこと。

ここ最近は自然災害も多いが、昨年の山岳遭難事故は、2293件と過去最多であり（前年比121件の増）、遭難者は2794人（前年比81人増）であった。その遭難者の76.4%が40歳以上でした。その分析は、いくつかのメディアや山岳関係の情報誌に掲載されているので、ここでは割愛しますが、上記の三つの法則や原則を考えれば、少しは改善されるのではないかと思いました。

正常性バイアスは、本会の機関紙に掲載されていた言葉で、読まれた方もおられると思いますが、御嶽山の噴火で、切迫した状況でも、適切な行動が取れなかったり、自分は大丈夫だと写真を撮り続けて、避難行動が遅れたり、失わないで済む命を失ったりした例もありました。火山に登る場合は、過去の噴火のことや災害の状況を、調べておき、頭の隅にデータとして入れておくことが必要です。

マーフィーの法則は、火山なら（今活動してない火山でも）噴火する可能性があると言うことです。あるいは、道に迷う可能性があれば、いつか道に迷ってしまう。滑落する可能性があれば、どんなにバランスの良い岳人でも、いつか滑落してしまうかもしれないと言うことです。

今年の５月２９日午前９時５９分に鹿児島県の口永良部島（くちのえらぶじま）で最初の噴火が起こりました。その噴火が、どのように拡大するか縮小するか解らないうちに、屋久島町は、その噴火から20分後に、口永良部島全域に島外避難指示を出しました。予測できないけれど、悪い方向に向かうかもしれないと、安全策を講じ、人身被害はありませんでした。

私は、登山を趣味としていますが、自分では登山の能力は低く、努力をしなければ、レベルダウンすると思っています。町を歩く延長線上にハイキングがあるとすれば、いつも歩いていれば、ハイキング能力はあまり劣らないかもしれない。しかし、クライミングの能力は、日頃の生活ではその能力に結びつく動作はありません。それで、定期的にクライミングをすることを心がけています。

ある時に、高崎山のゲレンデで、女性のパートナーとロープワークを練習しました。懸垂下降をするときに、私は、その彼女に言いました。

『一生に一度あるかないか解らないが、８環に髪の毛が巻き付いたりすることがある。その時はものすごく大変だ。スリング（クライミング用の細い紐など）や衣服の袖が巻きつくこともあり、その時は、にっちもさっちもいかなくなる。覚えておきよ』

そして懸垂下降をすると、彼女は、『痛い痛い助けて。髪の毛が８環に巻きついた』と、大声を上げました。私は、急いでテンションのかかったロープに８環を正常でない方法でセットし、プルージックでバックアップを取り、彼女のところまで降り、彼女の８環を抜重し、髪の毛をそれから外しました。

私も、テンションのかかったロープを下るシステムを使うことは、一生ないだろうと思っていたし、その技術も頭の隅に入れておいただけでした。

まさか自分に起こるはずはないと思っていた髪の毛の絡み。確率は低いが、起こるべく可能性のあることが起こり、それを解除しなければ、最悪の場合には、頭皮が剥げることになる。解除のシステムを頭の隅に入れておいて良かった。もう、同じことは起こって欲しくないし、同じことは起こらないかもしれない……。

懸垂下降：ロープを使用して岩場を降りること
8環：懸垂下降するときに使用する８字のような形の下降器
テンション：張力や緊張のこと。クライミングでは、ロープが張っている状況を言う。

写真はありませんが、イラストあります。
『墜落のしかた教えます』ウォレン・ハーディング著 1976年8月初版　山と渓谷社。昔の本ですが、同じような状況のイラストがあります。ロープを懸垂下降中にプルージック結びにあごひげを巻き込んだ図。約40年前の本ですが、著作権侵害になるかな？？？

ペンリレー・第１８回

## 山と私

園田暉明（13135）

私の生まれ育ったのは、日本棚田１００選に選ばれている、別府市内成の山村である。山とは何時も隣り合わせの生活をしていた。２０歳頃であったと思うが、日出警察署で勤務していた時、地元青年有志が企画した大船山ミヤマキリシマ鑑賞登山に参加した。

スガモリ越え、法華院経由であったが、段原一帯はミヤマキリシマの大群落で見応えのあるものであった。現在も細々と残ってはいるが、その変貌ぶりには失望するばかりである。その後、冬の由布山や６月の久住山にも行ったが、この時点では山行は趣味の１つに過ぎなかった。

私は若いころから健康保持のため、習慣的にジョギングをしており、病気により仕事を特段休むこともなく、過ごしてこられた。ところが、４０歳過ぎ警察学校勤務となってから障害が起きた。警察官の卵に体力育成のため、毎日のように実施させていた駆け足訓練に加勢したこともあり、俗にいう膝に水が溜まると言う症状が出てきたのである。そこで、新たに始めたのが、登山と散歩であった。

そして、山開きの日、祖母山に登る途中で案内をお願いした、大分市のＨ氏との出会いが、私を山にのめり込ませることとなった。Ｈ氏からはその後、大崩山や夏木山等を案内してもらい、雄大な景色や、危険個所を踏破した後の充実感等により山への憧れは一挙に膨らんでいった。特に、登山に熱中できたのは勤務部署との関係で時間的余裕のできた５０歳頃からで、ほとんど毎週末、くじゅうを中心とした山々にルートを変えて登った。その後、祖母・傾・大崩山系にも足を延ばしていった。特に厳しい山を除いては、単独山行であった。単独山行では、計画や現地行動等の全てを自分で考え、判断しなければならず達成感が大きいのに加え、急に山行を思い立った時でも、すぐに対応できるからである。

支部会員になった頃に比べ、最近では、青少年体験登山や年末忘年登山等を除いては支部行事に参加できてないところであるが、その理由は人生の最終章に近づき、今の内に是非やってみたい、学んでおきたいことが、他にたくさんあるからである。勿論家庭の事情等もある。最近盛んになっているボランティア活動もその１つであり、特に、山への恩返しとなる活動は是非やってみたいと考えていた。

時間にゆとりが出来た６０歳の定年退職後、研修を受けて、県の森林ボランティアリーダーに指定され、毎年１回、市町村回りで行う「県豊かな国の森づくり大会」に動員された。これを契機に、志高湖畔の森づくり大会跡

地や城ヶ岳山麓の漁民の森等での下刈り作業に参加し、支部事業として実施した大船山ミヤマキリシマ障害木伐採作業や傾山系のスズタケ枯死等の調査にも加わったところである。

山と係わりのないものでは、竹田市の豪雨浸水被害地区家屋での泥土排除作業や、最近始めた大分市情報学習センターでの、初歩的なパソコン指導補助活動（ｉの手会員）への参加がある。山行に関するやりたいことは、特に有名な、日本の山への登頂である。体力が落ちてしまう前にと、最近では、毎年１回、日本アルプスの山に、特に難コースを選んで挑戦している。（H１８　白馬岳、H２４ 槍前穂高縦走、H２５　剱岳、H２６　甲斐駒ヶ岳、北岳等）決行の４か月前から体を鍛えるため、必要以上に重くしたザックを背負って、近隣の山への山行を繰り返し、槍・前穂高縦走の時には、由布山西の峰鎖場横、垂直の岩場において、３点保持の登攀訓練等も行った。現在で７１歳、健康。　山行のお蔭と、山への感謝いっぱいである。

支部機関誌の文面に、支部長の支部事業に参加しない会員への悩みを目にした。自分もその１人ではないかと気に掛かるところであるが、色々な事情の中とりあえず、特に、公益性の強い事業にだけは参加したいと努めているのでご理解願います。

次回ペンリレーは中島洋祐会員（ 14963）にお願いしています。お楽しみに。

## 私の無名山ガイドブック N058

# 赤松塚(709.0m)・成ケ瀬（695.3m）・

飯田勝之（10912）

津江山系は釈迦ヶ岳から御前岳にかけての稜線や御前岳御前谷のシオジの原生林、渡神岳や酒呑童子山の山頂付近など、限られた範囲にしかまとまった天然林は残されていない。広い山域のほとんどがスギとヒノキの植林地で覆われ、自然度を味わいながら山登りができる道と言えば、稜線部分に限られている。そんな津江の山々の中でも、稜線に登ればちょっとした稜線歩きが楽しめたり、古い仙道歩きに興味を引かされたりできるので、そのいくつかを紹介しよう。今回は前津江村の二つを紹介しよう。

### 赤松塚

赤松塚は前津江と中津江を隔てる分水嶺上の、渡神岳と大山川の中間にある、渡神岳以東の最高地点で、主峰の渡神岳は三等であるがこの頂上には二等三角点がおかれている。もちろんまわりはご多分にもれず、見事に造林された植林地であるが、稜線部には自然林が残り、結構面白い稜線歩きができる。

日田から大山川に沿って国道２１２号を南下し、鎌手から県道西大山大野日田線に入り、上野川に沿って上っていき、曽家の分岐からさらに奥へ市道を入ると最奥の上曽家につく。集落の下で市道が終わり、奥へ林道が二つ延びているが、その少し手前で左に分岐して上る林道がある。この舗装された林道を７００ｍほどで右に荒れた林道を分けて、さらにこの林道はまっすぐ続くが、舗装されているものの、荒れているのでここから歩くとよい。

分岐から少し先で舗装が切れ、そのあとは急なところだけ所々舗装された、荒れた道である。、分岐から１５分あまり登ると道がわずかに下り始めるので、そこから右手の緩斜面に踏み込むとよい。

広い稜線状の植林地の中を緩く登ると５分ほどで平らな稜線にいたる。ここは山頂から北東に派生する分水嶺の稜線上で、ここより右（南西）に稜線を登る。緩い登りの稜線は所々大山川の谷をはさんで五馬の山並みが見え、ちょっとした稜線漫歩を楽しめる。

２０分足らずでやがて急な登りとなり、５分ほどの急登で傾斜が緩くなるとそこはもう南北に長い山頂部の端で、三角点は登りついた地点の山頂の北端近くにある。この山頂も植林地の中で、北の斜面はヒノキ、南の斜面はスギが植えられている。

参考タイム…林道分岐→１５分→稜線とりつき→３０分→山頂

地形図…２５０００分の１：豊後大野

### 成ケ瀬

このピークは大山川とその支流の上野川にはさまれた稜線上で、上記の赤松塚から高倉山を経て北に延びた稜線上である。国道２１２号の松原から汗入場に入る市道を上ると、急斜面に民家がへばりつくように建ち並ぶ中を通り、国道から約１．３ｋｍで大きく左力

ーブする地点の右手奥に赤い屋根の公民館がある。

この公民館の反対側に市道から山には入る小径があり、これが地形図にある破線の道だ。すぐ上で左に墓への道を分けて古い山道が斜めに上へと続いている。この道は、すぐ下の民家で教えてもらった道だ。

入口付近には雑草が覆っているが、林の中にはいると道は荒れ果てているもののはっきりしている。かなり広い山道で、昔はたぶん馬車道であったであろうこと思われる。昔の里人たちの生活が偲ばれるようで、こういう古い山道を辿るのが私は好きだ。

両側がすっかり崩れ落ちて、広く埋まった山道を、曲がりくねりながら登ると、公民館前から３０分あまりで谷が広くなり、畑地状に石垣を積んだ二段の小広場が現れる。その広場もスギの成木林である。道の脇には古い炭焼き釜の跡と思われる石積みもある。

地形図の通り、その奥で道が二手に分かれているのがわずかに形を残している、まっすぐ登ればすぐ上が高倉山から北に派生する主稜線鞍部の峠で、小さな掘り割りとなっていて、地形図のとおり、道はさらに上野川に向かって下っている。峠から右に、稜線を登るのだが、小さなピークを登り越し、少し下ると一旦広い鞍部で、さらに小さく下ったあと、美しい自然林のなか、かなりの急斜面の登りとなる。自然林が残っているのは急斜面のおかげであるが、高度差３０ｍ足らずの登りで三角点のあるピークに達する。大きな露岩が点在する山頂部の中ほどに４等三角点の標石がある。

参考タイム…公民館前→３５分→主稜線鞍部→２０分→三角点山頂

地形図…２５０００分の１：豊後大野

赤松塚

成ヶ瀬

# 会務報告

## 登山入門教室・座学講座終わる

４回目を迎える登山入門教室が去る９月２日（水）から開講された。受講者は定員３０名に対して２７名の応募であった。９月１６日（水）、３０日（水）、１０月１４日（水）と延べ４日間８時間にわたる座学講座が終わった。会場は大分駅南口にある「ホルトホール」で初回の平成２４年のトレッキング入門講座から続けている講座方式である。

講座は前年とほぼ同じ構成で、１日に１時間２時限の座学が４日間、計８講座で、その内容は、

第１回講座９月２日①山に登ろう（楽しく楽な山の登り方を山登りのスタートから）講師：星子貞夫、②山の登り方（疲れない安全な歩き方登り方、下り方）講師：安東桂三、

第２回講座９月１４日（水）①山での病気やけが（山での病気やけがの救急対応・ファーストエイドなど）講師：野村芳雄、② 山の装備や道具（山で必要な装備や道具の選び方、使い方など）講師：西あずさ

（９月１４日の講座のようす）

第３回講座９月３０日①山の紹介と登山計画と山の保険講師：興田勝幸・加藤英彦②、より安全な登山のために（事故や遭難をしないための心構えや対応など）講師：首藤宏史

第４回講座１０月１４日①山の地図の見方（地図の見方、地図と磁石の使い方、ＧＰＳの使い方など）講師：飯田勝之、②山の天気の見方（天気図の見方、天気予報のとらえ方、山の気象学など）講師：佐藤秀二

全て会員の手作り講座としての実施である。

この講座の目的は、より多くの人たちに山登りの楽しさと素晴らしさとその味わい方を知ってもらうと同時に、大自然を相手にしてのスポーツとして、その中に秘められている危険やアクシデントの可能性を知ってもらい、それらに対応できる基礎的知識や技術、技能を知ってもらうことにより、よりいっそう山登りの楽しさを深めてもらうことにある。そしてその受講者の中から、日本山岳会の会友や会員になって、会の増強と活性化につなげる・・・。それがこの講座の目的である。

４回の講座受講者は終えたが、今後さらに１１月１４日(土)１５日(日)に杵築市大田村横岳キャンプ場でのキャンプ体験と鋸山登山、１２月１９日(土)２０日(日)に九重ヒュッテに泊まって、山小屋泊まり体験と泉水山と三俣山の冬山体験登山の二回にわたる実践登山講座を終えて、全課程を修了する予定となっている。

（文責　飯田）

# 支部合同会議報告

支部長　加 藤 英 彦（8765）

日時　平成２７年9月２０日（土）～２１日（日）
場所　東京都千代田区　主婦会館プラザエフ会議室
出席　加藤英彦、飯田勝之

１日目（午後１時～５時）

会議は先ず６月総会に新会長として選出された小林正志氏があいさつ。まず組織について、山岳会再生委員会を立ち上げた。会の活性化をめざし改革をしよう。ポイントは1）支部活性化、会員増強につながる。2）ユースクラブの推進だなどについて述べた。

つづいて出席の役員全部の自己紹介、各支部の支部長、事務局長の自己紹介。そのあと議事に入り、あらかじめ配られていた支部合同会議資料、資料（別冊）、役員支部委員会名簿計３冊をもとに進行された。

1）日本山岳会の組織。業務執行体制　担当理事と業務執行理事との違い
2）日本山岳会の会員動向　会員減少、高齢者の増加、新入会員を増やしていかねば、
3）支部における会員動向　支部ごとの会員動向、新入会員獲得ランキング
4）平成２６年度の決算の概要　財政状況の悪化、会費収入の割合減じている。
5）日本山岳会再生委員会の今後の進め方　会員増強財政基盤ＰＴと収益事業会員サービスＰＴを統合させた委員会とした。制度改革、会員サービス、収益事業等検討事項
6）１１０周年記念事業の推進状況　海外登山、記念ツアー、国際交流、出版事業等
7）ネパール大地震救援募金の状況等　救援募金の状況2，１４０万円に達した
8）トレイルランへの名義後援の考え方　原則名義後援はしないが個別検討事項。

Ⅳ]業務説明

1）事業計画書の作成について

公益目的事業について、公益法人認定で定める公益目的事業の種類、事業計画書、事業報告書の作成、支部事業計画書、支部事業報告書（記載例）　助成金、寄付金等を受けるための取り組み　年賀寄付金関係　助成団体説明会

2）会計報告の作成

会計報告書作成の留意点、本部関係と支部独自会計の区分について、経費の精算の原則と処理方法　会計処理の勘定科目　支払報酬の源泉徴収、寄付金の取り扱いについて　日本山岳会への寄付についての説明、処理方法

Ⅴ]協議、改善等に関する意見交換

会員を増やす事業を、地方新聞と提携して会員増強、支部ルームをもつとよい、親子登山の活用、登山講座の講師プロ登山家を、会友制度を設けている支部の支部会費とその額。広島支部の「山の弁当」の取り組み報告。

終了後会場変更して懇親会があった。

２日目（午前９時開始　午後１時終了）

日本山岳会説明用動画の支部への提供について、本部で作成した会への入会を勧誘するための動画を約２０分みた。

【内容紹介】○何故組織に入る必要があるのか？　見知らぬ同士の山登りの危険　○日本山岳会の５つの特色日本で最初にでき、オールラウンドな山登り○日本山岳の歴史、創設から現在までの動画や写真で紹介○組織の紹介　○施設の紹介　○全体の大きな行事○情報　○主な社会貢献活動、○主な支部の社会貢献活動　○会員を対象とした活動　○山岳保険について○入会後の活動について

**協議、意見交換**

１）各支部における平成２８年度「山の日」の取り組みについてあらかじめ各支部のアンケート回答をもとに説明があった。幅広く山の日を考える何かをしてほしい。知っていただく取り組み、できる範囲での仕事、他の山岳団体との連携等　８月くじゅうでの山の日イベントの説明もあった。

２）家族登山（親子登山）事業の各支部における実施について

２）支部の事業推進のためのブロック割について。提案。九州ブロックは５支部にて異論はなかった。ブロック長を定める。支部の延長で考えて、手段であって目的でない等。

**連絡事項**

○第３２回全国支部懇親会について　平成２８年４月９日１０日　越後支部　弥彦山

○平成２７年度晩餐会について　平成２７年１２月５日　京王プラザにて

最後に事務局よりの連絡事項があり、午後１時終了

さまざまな意見がでて盛り上がった会で、資料事前に配布しておけば、役員の説明も簡略化でき、もっと短い時間でおわるのではないかとなどと、、参加者がいろんな形で意見、感想をもれなく出した良い会議であった。

（支部合同会議・９月２０日）

# お知らせ

※　会員の皆様、本部年会費納入の口座振替制度が始まってますが、まだ手続きの終わっていない方は早めによろしくお願いします

## 忘年山行と忘年会のお知らせ

年末恒例の忘年山行と忘年会を次のような日程で実施します。今年も毎年おなじみのゲスト、重廣恒夫さん（日本山岳会本部監事）が山行と忘年会に出席します。

年に一回の支部会員（会員・会友）が一堂に会する場です。みんなで和やかに集い楽しみましょう。みなさん万障お繰り合わせのうえご参加下さい。

忘年山行　12月12日(土)　鹿嵐山(757.8m)御許山(647m)

12月13日(日)　鬼落山(576m)・八面山(659.2m)

忘年会

場所　宇佐はちもんの郷(旧かんぽの郷宇佐)

宇佐市大字川部１５７１－１　TEL:0978-37-2288

日時　12月13(土)　午後6時から

会費　12,000円(15日の山行参加者の弁当は別)

集合場所と時刻

12月12日(土)：午前7時・大分駅上野の森口

現地集合の場合:鹿嵐山下の駐車場8時30分

12月14日(日)の山行に朝参加の場合:

はちまんの郷午前8時・集合

忘年会参加:12日(土)午後5時30分　「はちまんの郷」受付

参加申し込み:12日山行・12日忘年会・13日山行の三つに区分して、各々の参加について11月28日(土)までに本支部報同封の用紙でご回答下さい。

## 年次晩餐会に一緒に参加しましょう

会員の皆さんにはすでに本部から案内状が届いていると思います。今回は日本山岳会創立１１０周年記念の年次晩餐会です。みなさん一緒に参加しましょう。

日時…１２月５日（土）午後6時から

場所…東京・京王プラザホテル：本館５Ｆ

会費…１５，０００円

受付開始…午後1時３０分から

講演会・午後２：００～５：００
図書交換会・午後２：００～５：００
※ 参加記念懇親山行は「本栖湖パノラマ台・中ノ倉峠」という隠れた名ハイキングコースです。九州からはわざわざ行けないところですので、行く価値はあります。（参加費５０００円）
出次の返事のはがき投函は１１月１３日までです。（参加費も同日まで）

## 月例山行のご案内

### １２月月例山行：鹿嶽山・御岳山・鬼石山・八面山

日　時：１２月１２日(土) １３日(日)
※ 忘年山行として実施します。
※ 忘年山行の欄をご覧下さい

### １月月例山行：足立山(597.8m)（福岡県）

日　時：1月7日(日)
出　発：午前7時発
集合場所：大分駅上野の森口広場
参加申込及び問合わせ連絡先：１２月２６日（土）までに
リーダー：阿南寿範（080-3187-2003）まで

### ２月月例山行：五勇山(1662m)・烏帽子岳(1692.2m)（熊本県・宮崎県）

日　時：2月２０日(土) ２１日(日)
集合場所：集合場所、時刻その他のことは次号の支部報でお知らせします

### ３月月例山行：郡岳(825.8m)（長崎県）

日　時：3月２７日(日)予定
集合場所：集合場所、時刻その他のことは次号の支部報でお知らせします
リーダー　安東桂三

## 第４回支部役員会の開催案内

平成２７年度第４回支部役員会を下記の通り開催しますので役員の方はご参集下さい。

日　時：１２月１４日（月）午後6時３０分より
場　所：大分市「コンパルホール」
議　題：① 登山入門教室について
② 支部創立６０周年に向けての準備
③ 当面の取り組み
④ その他

## 韓国山岳会蔚山支部との交流について

実施予定：3月１９日（土）～２２日（火）

韓国山岳会蔚山支部との交流登山は、今年は我が支部が韓国を訪問して登山する順番で、１１月の連休に行う予定で、蔚山支部とうち合わせを行っていました。しかし、MERS（マーズ）（中東呼吸器症候群）の流行が治まらないため、計画を一時中止していました。

マーズの流行も終息の傾向にあるので、過日蔚山支部とうち合わせをした結果、3月１９日(土)～２２日(火)に実施の方向で、日程など調整中です。正式に決まりましたら次回支部報でお知らせします。

## 会員消息

橋本　祥案さん（会員番号４３７５）
１０月２日にて満１００歳になられました。大分合同新聞の報道によると大分市の長寿福祉課よりお祝いの行事があったとあります。おめでとうございます。
９３歳のとき久住山に登ったことがありますがもうあれから７年もたったことです。
いつまでもお元気でお過ごしください。

姫野　和記さん（会員番号５９０３）
佐藤　浩幸さん（会員番号６０６２）
お二人とも今年度みごと永年会員の資格を取得されました。これもひとえに長い間ご自身が健康に留意されて山の親しんできたおかげでしょう。１２月の晩餐会の席上で発表、表彰されます。おめでとうございます。

## メールアドレス再登録のお願い

ＰＣのメールアドレスをお持ちの方には、支部報以外にも、適宜各種の情報を伝達するようにつとめています。しかし、事務局に登録のアドレスが間違っていたり、アドレスが変更されている方には、届かずに返ってくる場合がかなりあります。

そこで改めてお願いします。事務局にアドレスをお知らせ下さっている方で、平成2７年に入って事務局から一度もメールが届いていない方は、上記のことが考えられますので、もう一度正確にアドレスをお届け下さい。

届け出る方法は事務局専用のアドレス jachigashi@leo.bbiq.jp に氏名だけ書いたメールを送って下されば結構です。（@のあとは leo です 1eo ではありませんのでご注意）

アドレスを変更された方や、新しくアドレスをお持ちの方も同様のお知らせをお願いします。
これから、新しい情報などできるだけ適宜お送りしていく考えです。

## 個人投稿のお願い

支部報に定期的に個人投稿下さっているか違いますが、そのほかの方もご遠慮なく投稿下さい。山登りに関する山行記、随筆、詩、俳句、短歌、川柳などなど・・・・お待ちしています

## 後　記

・九重山の遭難慰霊碑が倒れているとの情報を聞いて驚いた。その旬日前に慰霊碑前で山の安全を祈ったばかりのことだからである。この行事を始めて以来毎年雨で、初めて晴天のもとの読経を聞いたばかりであった。

・あの巨大な石碑が倒れるなど、尋常の判断では考えられないことだが、現実に起きたことだ。いたずらなど人力でなしえることではない。おそらく慰霊祭のあとの台風２６号のせいだと思われるが、山には平生を絶する気象の力学がおこりうるということを、これまでも幾多の伝説で聞いているが、今回もそのような現象によるものなのか。

・このたび、支部青年部の立ち上げに向けて動きが始まった。支部会員の平均年齢がほぼ６２歳、数の上では多数が６０歳以上の支部である。（しかし、全国の支部では最若年にランクの平均年齢であるが）そうした中で、若年層会員が遠慮や気兼ねしなくて、元気でのびのび登山経験や研修を積んで行けるような支部にするため、青年部の立ち上げを課題にしてきた。

・７月末にその準備会を開き、手探りの中から青年部の立ち上げの動きが始まった。はじめはよちよち歩きでもいい。対象年齢は５０歳未満である。決してみな若くはないが、支部の年齢層で見ればうんと若い。こうした会員がのびのび、そして積極的に登山経験を積み、より先鋭的な山登りに挑戦して、その気風を次世代につなげる。そうした未来を秘めた発足を期待したい。

（K・I）

公益社団法人日本山岳会東九州支部
東 九 州 支 部 報　第７１号
２０１５年（平成２７年）１０月２５日発行
発行者　加 藤 英 彦
編集者　飯 田 勝 之・中 野　稔
発行所　事務局
〒874-0820 別府市原町５－１４　飯田勝之方
TEL・FAX　0977-21-3437
Email　jachigashi@leo.bbiq.jp